

編集後記

◇ 3月ごろから始まった新型コロナウイルスの感染拡大は社会、経済の各方面に影響を及ぼしており、当振興会に於いても例外ではなく、事務局では在宅勤務や時差通勤を強いられた。また、振興会の活動では3月に予定された「いも類講演会」はイベント自粛で急遽中止となり、関係者には大変なご迷惑をおかけした。また、5月に予定されていた役員会（第1回理事会、定時評議員会）も通常の形では開催できず、役員の方々のご了解により書面による審議及び決議をお願いすることになった。今回の役員会では例年の通り、令和元年度事業報告、令和元年度財務諸表及び公益目的事業実施報告等が議案となったが、書面ではあるが慎重審議のうえ決議頂けることに感謝申し上げたい。

なお、令和2年度の新規事業として、本誌「いも類振興情報」にこれまで掲載された記事の検索システムを、本誌の印刷所の(株)丸井工文社のホームページに構築することになったので期待頂きたい。

新型コロナウイルスの緊急事態宣言は解除されたが、感染の第2波、第3波も予想されており、“新しい生活様式”の実践による早期終息を切に祈りたい。

◇ 今年は、サツマイモの在来品種として有名な「七福」が到来して120年、同じく有名な在来品種である「源氏（三徳蒔）」が到来して125年という記念すべき年に当たっている。両者とも広島県矢野町出身の久保田勇次郎氏が、1895年（明治28年）にオーストラリアから「源氏（三徳蒔）」を持ち帰り、1900年（明治33年）にはアメリカから「七福」を持ち帰り、その品質の良さから西日本を中心に普及したものである。この2品種は明治後期から第2次大戦後の間、食用として特に飢饉の時は救荒作物として多くの命を救い、更に、外来種として優れた特性を持っていたことから、サツマイモの品種改良の交配親として盛んに用いられ、特に「七福」は農林1号、護国蒔、沖縄100号など優良品種の交配親として多大な貢献をしてきた。120年、125年を記念し永く記憶にとどめたい。

◇ 本号No.144では、調査・研究において「水耕栽培由来小粒塊茎の種いも利用の可能性と課題」と題し前北海道農業研究センター契約研究員の中尾敬氏に長文を寄稿いただいた。ご承知の通り、中尾氏は長年にわたり長崎県の研究所においてバレイショの研究に従事されてこられ、その退職に当たってのテーマとして現在課題となっている種いも生産の効率化に取り組みられ、その成果の一部を寄稿いただいたものである。高品質な種いも生産は作物生産のキーテクノロジーであり、今後ともご活躍頂きたい。

（鈴木 昭二）

いも類振興情報 第144号

2020(令和2)年7月15日発行

定価 1部 500円

年間購読料(季刊) 2,000円

発行 一般財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303

TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225

E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp

郵便振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社